

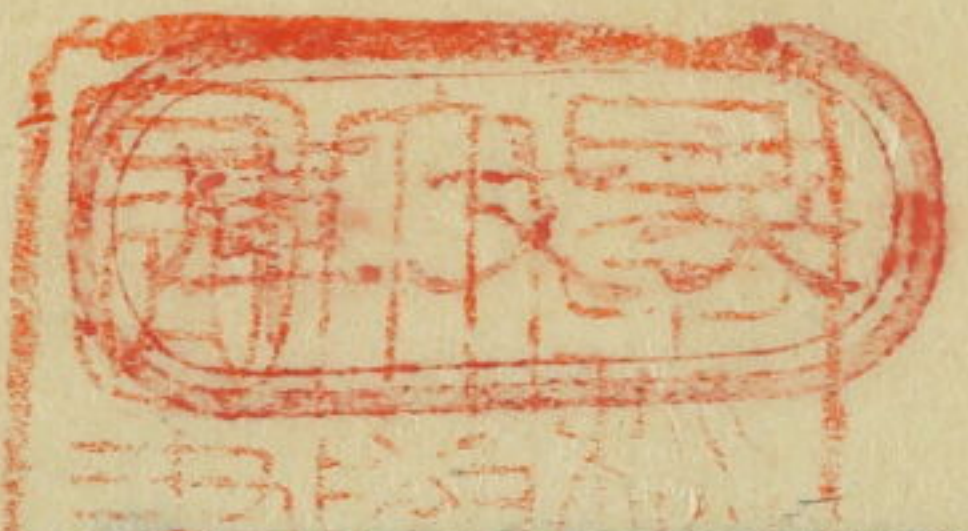
風來六部集

12

^ 13
3682
4



門 へ 13
號 3682
卷 4



里乃をどま評自序



莊子^まが寓言^{ごうごん}は式部^{しきぶ}が筆^{ふで}どき

み司馬^{しやま}相如^{さうじよ}が子虚^{こじよ}烏有^{うごう}弘法^{こうぼう}

大師^{だいし}の兔角^{うかく}龜毛^{きまう}去り^{さり}とてハ

ク—^く物^{もの}あり。予^よも亦^{また}彼^か虚^こ云^い子

たうしひひ氣まき流り志しぬぬ麻布あぶ先生せんせい。
古遊こゆう花景はなけい乃の人物じんぶつを設しやうくく訛し。
八百はちひゃくを書かちちしし以も針はりを持もちち。
いいしし火ひを以もくく水みづととももるるハハ系けいが
持もちちままへへの滑なめ替かあありりくく文ぶんの餘よ情せいの

譚た言いありり。或あるハハ所しよ流り流り地ち名めいああんんどどハ
人ひとの耳みみ馴なるる子こ便たりり直ただるる其その名なを
世よぞぞ七しち因いん佛ぶつの物語ものがたりななれれババ寧なろろふ
此この流りるるままハハ河かへへずず又また人ひと怪あやむむハハ此こ。
安本元年けのえ手て狐きつね乃のららるる秋あき。



有頂うてん天皇九代くわだい後胤こういん風来散人
か居い續ぞくのの風ふう呂りょ揚りやう宿しゆく酒しゆ乃の夢む中ちゆう子こ
 筆しつをを採さい取と

御覽
作

終

さきバ結むす一ひときこと鏡かがみ子こ牛うしの牛うし連つらるる馬うま連つらるる回まわ氣き
お求もと回まわ氣きお集あひの習なまにに古こ越こ教えん人じんととる
志しれれるるのの殊ぜん異いはは見み舞まはは有ありりししおお言いふふ
布ふ先生せんせい乃な門かど人ひと花はな系けいととりりるる當あた世よ男おとこはは
抑おさりりとと四よ方かた乃なもものの終はつ三さん人にん業ごうせいのの文ぶん殊じゆの
智ち恵えははどどとと入いららせせりりとと理りよよ入いるる例れい乃な
拵しよひひのの魂たま膽たん呻う。毛け景けい志し乃なのの骨ほね乃なく

懐中懐中乃な小こ冊さつをを言い出で。先生せんせい連つらるるもも以も存ぞん有ありり
ト。ああせせとと吉きち原げん細こ見み乃な一いち枚まい摺すり墨ぼくのの諸しよ環わん
ととりりるるののありり。押お込こ一いち巻まきととりりをを。古こ摺すり中ちゆう
下げ樓ろう下げ地ぢ鷹たか州しゆう化け一いちとと螢あゆとと成なりりり。今いま五ご丁てい
町まちのの受うをを争あひひ全ぜん巻まきいいららせせりり。京きやう
のの倡おほ妓ぎ乃な江戸えど地ぢととりりとと。それそれ乃な昔むかし乃な喩たと
草くさ今いま乃な吉きち原げん深ふか川がはととりりととみみまませせ。ああのの子こ

梅様。花乃さるまゝい春見城上の有る
や。あ一人君やで甲きみ返く味
とそれ。古に教人熱す。彼を
き乃一板摺。白ひも思ひ雨を一面
液とさうくこと。山の手や吉原
まぐ夜さるある吐息をほひて中
くは。嗚呼笑止あるるをぬるその我

日本小豆分りといふも。五穀を徳り金浪
多くある物に半を欠ず。熱花の地志
あ。京よ湾原大坂よ新町長崎持丸山
とらど如。諸國乃是里かぞくそしがく。
各土地の風俗よく伝せも面あうらば
るハ。有が中にいお江戸の吉原。一
い。かく二のあきゆい人これあるところ

バそ更子いふがごとくなり。世上よく目小立等量も
此里の女と競てハ思ひの外に見おとれく。近
き院披わ山下にくとんぶ茶釜とすに
ハ一段の大評判。能くすば吉原まで何と
しる女良ありしが。吉原子居ハ内ハ本乃
十把一切あげたて目小立りとなし。
廊外（いんげい）押出せば掃溜（しほり）の落砂（おとし）の中（なか）に金（かね）

飛ぶ茶釜乃振出、めと大評判又及一
なり。斯（か）吉原此女帝（あま）の傍（かた）て宮（みや）へ見え也子
る。幼少（わらわ）とりの青（あお）が。之居振（あま）孫（まご）繫（つな）
容（よう）才（さい）一氣（いき）を大切（たいせつ）ら。兎の時（うさぎのとき）とり婦
女良此仕（か）四方（よ）あさしあり。就中（すなは）中（ちゆう）古（こ）。
たま格（か）子（こ）此上（かみ）品（ひん）小ありて。琴（か）之（の）絃（げん）を
いふ及（およ）びず。清（きよ）奇（き）餅（もち）造（つく）香（か）茶（ちや）の湯（ゆ）。碁（ご）

双六ちうり碁方。何れの道みちに之これ害わざはひかゞん。諸藝ちうげい
と知して知しる教しよせん。見識けんしき有ある。居ゐる。分ぶん。
上方かみかたに女めをなどのの生なれたももる。ぬぬがが吉きち
原はらなり。今いま乃なさんちや分ぶん也なり。一ひとたたああ乃なり
たまたま格かく子こにに者ものららずず。ささ氣き地ぢ何なにりり風ふう雅や
何なにり。者ものたた一ひとななここにに藝ぎ淋りんあり。ちちまま昔せきの
風ふう義ぎ跡あと甲か右みぎ川がわ子こ水みづ跡あとをを假かり令しよ善ぜん薩さつの

影かげ向むかあり。天人あまてんが天あま降くだててと負まけぬが此こゝ地ぢ乃なり
女めをななり。長なが場ば不ふの賣う女によども。奴やつととなりと
ありあり子こババややちちりりかかへへ玉たま回まわああ子こ一ひと月げつ一ひと世よ
八百やっッッでで顔かほ控くわめめてて並ならぬ。さんさんとと松まつと
うう名なををかかへへくく。嬰えい喜き傳たづ婢ひにに一ひとくく使つかひひぬ。
いついつそそ鉄てつ炮ぱう店みせへへででをを追お下くだしし。免めん許ぎよのの控くわ
取ととと固こ場ば不ふ。雲うん泥でい万まん里りの遠とほろろ勢せいを

見せてこそ吉原ともいふべし。いふも来
世子成^{じやう}ばとて。是場下の土娼^{どいぢやう}は子大生^{たいせい}を
名を分^わく。二人禿^{かぶ}は髪持^{かみもち}。赤^{あか}形^{かたち}も志^し子^こ
ぬた中。其癖^{くせ}髪^{かみ}髻^{けい}古^こ子^こ骨^{こつ}を折^お。赤^{あか}鴨^鴨の
足^{あし}どり鬚^す絲^し傀^{かい}儡^{らい}中^{ちゆう}の町^{まち}れ人^{ひと}立^たに氣^き
を毛^け一^{いつ}く眩^{めくら}指^{さし}は乃^のいざこざ面^{めん}例^{れい}な
里^り。又下地^{げち}切^きる吉原^{きちげん}に居^いる女^{にょ}良^らをふい

なし。親方^{おんかた}ハ垂^たさ^さとれハ。幽^{ゆう}冥^{めい}とさうま^ま入^いて
も高^{たか}さ^させ^せ友^{とも}心^{こころ}ありととも。イエ。こつち^{こつち}の^の是^{こゝ}
場^ば下の^の土^{つち}妓^ぎ流^{りゆう}と奇^き樂^{がく}子^こハ均^{ひと}成^{なり}いせん^と
はく^{はく}と^とせ^せば^ばお^お淡^{たん}た^たぢ^ぢや^やる^る。苦^くさ^さり。吉
原^{きちげん}中^{ちゆう}に智^ち恵^えが^がな^なく。女^{にょ}良^らハ氣^きが^がな^なき^な。
形^{かたち}乃^のど^どく^くり^り成^{なり}り^り。剝^{はく}自^じ憐^{れん}と^と入^い
小^{せう}細^{せう}見^{けん}を^を持^{もち}く^く世^よ上^{じやう}ハ恥^ちを^をさ^さり^り。

是場所のありまぎを引舟かといふ氣を
やめく。あが来いどもを吉原ト也と古
流の角を密さぬやうに去つと守て居る
時ハ眞座後見ゆふれ自繁昌と云ふ
移り安きハ人々上方にても一比ハ徳園
町崎の内ハ乃新地ハ繁昌一。新町崎系
と不系氣ありしが。を以ハ又そろくと解

ハ解通ハ復るあり。思ひ舟にそつちりやハ
一死斗てさめあ。當年の像などそ
初ハ手かきしてかうかりし。場々終くお
りくきて。役者ハ声色門をざり。何や
似く氣は毒なりとら有く。乃活判
ト有し。病子鷹ぬまや茶ハいや
おを抜独樂をまへ。いろくにあやべ

ねば賣ぬありものぢけた。まゝは病は癒茶は
だまろて居ても實はまるなり。料理で居
て居る。さぬくの思ひ付ハまや
茶を賣回あそく女郎の恥と心得て
又藝者帯間と。是場ありまぢれぬ
やうにと石の心付あり。かくしを
そくみしを大を面ハせぬがはし。茶が安

ふて、これに戸あり。賣人の妻は
地合がぬい。係振が氣に入らぬ。換振が當
せよびうぬくと。代物あつめは氣ハ付ず。あぢが
あし骨を打。今も振不修くと思ひ付が
かじじ。中の所は男侶茶屋。大門は
で表よ裏うらのつなぎ。
私おん頭がらがゆりかをさきむ。モフそろく

とけそ。ハ。云。切。取。が。吉。原。也。吉。原。が。云。切。取。
也。身。が。か。き。取。お。れ。が。身。也。女。は。と。賣。女。
の。は。と。賣。何。ぞ。も。撰。取。十。九。文。相。若。く。女。
を。さ。う。く。し。眉。を。あ。め。く。や。う。家。を。時。を。
糸。浪。烟。管。を。え。来。し。灰。吹。を。さ。ち。く。と。
教。あ。ざ。笑。く。曰。古。拙。子。の。禱。言。ま。い。り。似。
て。志。倣。し。され。バ。古。奇。め。と。極。く。見。よ。

む。乃。青。ぬ。里。之。也。あ。か。く。く。と。女。八。撰。
り。同。一。天。地。の。方。に。生。を。る。人。を。玉。を。
り。け。那。を。り。け。村。を。り。け。里。を。り。け。を。
お。を。禱。ず。ま。八。撰。事。あり。い。う。に。も。吉。原。ハ。
日本。才。一。の。拙。不。く。女。の。染。務。せ。う。り。と。
り。ども。百。人。が。百。人。十。人。が。十。人。お。か。し。
能。と。定。ま。る。お。も。何。く。也。細。見。鳴。呼。お。

江戸此市子有とく。或、青毛あざなひく
 老猫いぬ其獅子鼻こま極尻たがらの麴こむぎをきりに
 何べ。吉原の女郎なればとて代して
 有節有く女を女郎と産にも何べ。
 彼乃中うし能く極うまさをあふとあらず。
 又困切而の女言そく下り細工乃由來
 合ふもあらず。つくる、而ハ親兄弟あやう榮あやう繼あやう

榮花で賣もせは為事いし此の如くは。
 吉原へは屋場へ入りも皆夫に同縁いん
 づく。能く有悪いと何り。江戸あうや
 ぎと旅うかざ祝旨味うまも遠ハ花はなりり何
 と地酒など水の邊と何くさうは。吉
 原にも縁へちま瓜うりも。屋場而あも異人
 あり。又幼少かしく育うテか。立飛た鳥とり

るまいくさうま髪かみ容よう質しつ一ひと氣きどろを大切たいせつと氏うぢ詞ことば
 又また非ひあり。習しゆい性せいと成なりとしへ。針はり本もと乃すなは梅うめ
 うけぢの松しょう仕し色いろあもよるべしと堯ぎょうの子こ
 丹たん朱しゆ不ふ肖せうあり。舜しゆんの子こも亦また不ふ肖せうあり。
 三年さんねん磨をても無む患わづらひ子こを悪わるく。十じゆ年ねん
 考かんがへて石いし八はち硬かたし。又また誇うたが文ぶん鳳ほう鳴なりそ
 生なまれながく子こ熊くま之の所ところなり。八はち土つち流ながぐ

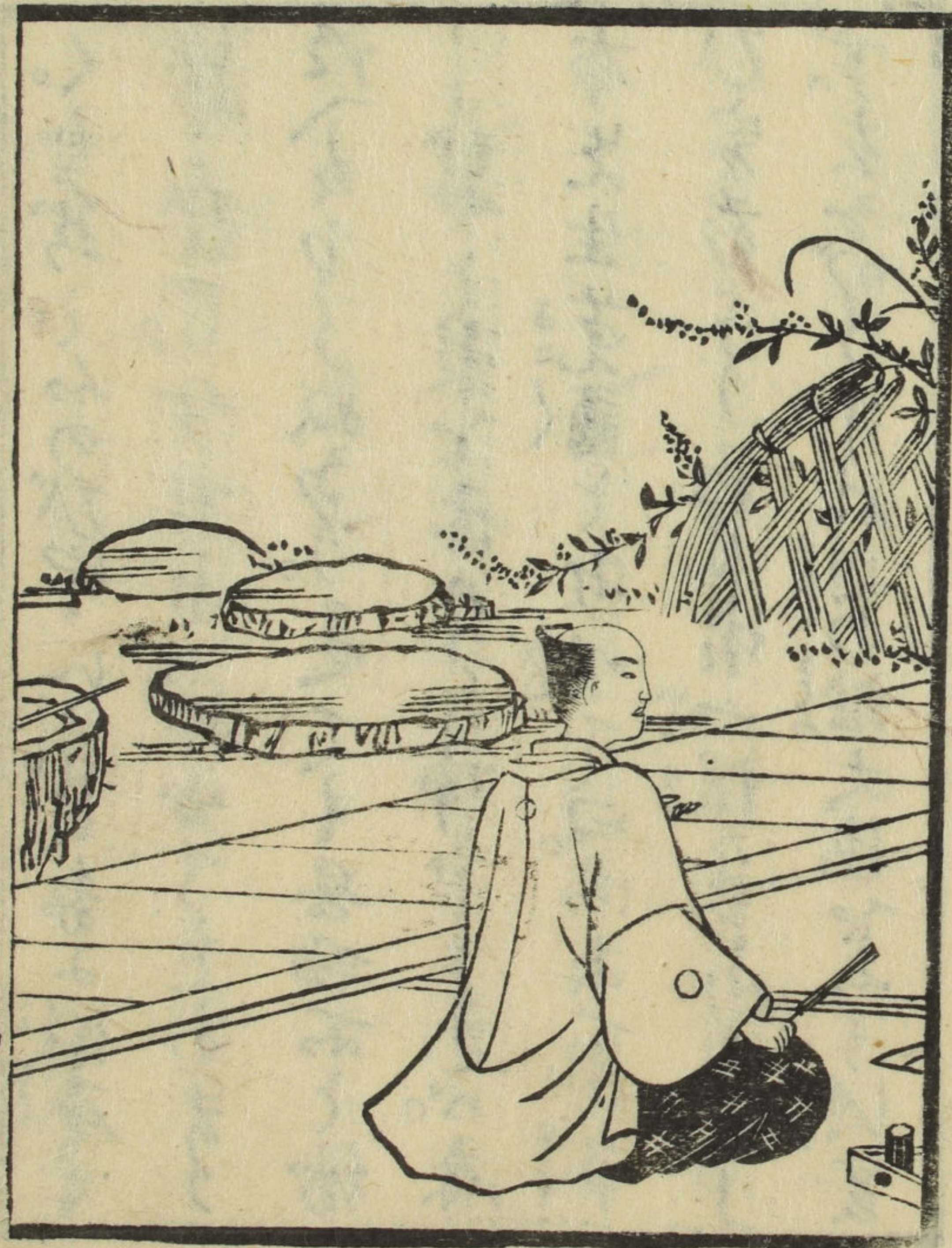
八はち端たんがけを藏くらひ王おう子こかゝ菊きく之の巫まじか出でされむ。去こ
 檜ひのき中なか丁ていへ板いた重かさね。根ね津つ青あお羽う菜さい菝は圃ぼにと
 揚あき妻さい妣ひ西せい施せいが有ありも志しれず。叔しやく又また尚なほ世よ
しんま疎そ族ぞく涿たく川せんの風ふう流りゅうある事ことを志しむ。
 只ただ一口ひとくち小こ罍たい埒らちとの之の之の免めんふまへ片かた後ごい
 たきりゆたあり。吉きち原げん乃すなは地ち長なが水みづ陰かげり
 かくより。一方ひとがた口くちあしとる及およむをく。くはだ

てぎまべりるあづぶ。深川の地ハ湯氣不
く偏らず。私乃通路自由に之。牡蠣
店の牡蠣文蛤町此文蛤。鰻鱺ハ其江
丁に名高く。馬金堀ハ万年丁に之く
きな。竹子の調味料屋ガ酒蔵。二軒
茶屋。二軒は浪らず。引栄之。塩漬塩漬
焼ざれども賑ふ。角力あり。岸長あり。

と并あり。数あり。本場の園釣ハは
た公望を歩とこび。三十三間堂の大矢敷
よの岩由基も汗を流す。新使の名りつと
あく古。石場乃人自和。ぎ。道々案内
入所。遊びの江を遊助屋表表楼裏
樓。裾たやぐ。佃新地。中にも古橋中丁
に之令書け者多く。川には船笑と船。

陸子ハ轆くわくま乃屯とんをあす。送まわるむくいの提てい灯とう
と字じ治ちの蜜みつ花はなかぶかぶとく。茶ちや座ざヲ持も
込こ森もり衣いを唱な門かどの博はく乃の者ものがどしどし。買かひ毎まい
の乳ち交かちれやうやうににくく。山さん海かいの美び味あじ刻こく
を正ただし。藝ぎ者もの乃の調てう子し乃の常じょう小せう務むりさい
ぎぎ姓せい小せう天てん下かは教きょうれれし。世よ上う乃の女にょ老らう
羽う織お着ぎと。ササワワササヲヲセセくくの浮う柏はく子しと

皆みなは里さとと始はじめとと。又また女にょ帝ていは氣き象しやうをいいとと。衣い
店てんといいるる返たいををささくく。或あるは意いのの三さん回かい目めののと
こけ隔かぎと仕し内ないななくく。衫しんはは袖そでのの衣いのの
普ふ法ぽう。系けい司し長ちやう持ぢ衣い具ぐ法ぽうををささくく。抱かか乃の仕し衣い
せ茶ちや座ざ私し者もの。牽けん引いん末まつ社しゃの付つ座ざ。紋もん目めの敷しき
くく。着きののややりり。衣いのの二に面めんはは素すももななくく。
同どう一いつ勅てつといいひひををぐぐ。内ない法ぽうのの着き一いつみみ着き



く。自然と心のびやうに。氣象は微塵も
もみほし。今吉原へ押出るとあり
泣へたりぬあり。是ても是場所と結
一むやと教を赤めく。悔ドきき。麻
布先生莞爾と打笑て曰。此友下の年
ひ室あたりあり。名一理なきあり。世あり
ず。去るがう井此内の嘘大海を去るは。安

の虫水と笑入の薄あり。史古たり著一き
れ。江に神楽野上の里。大坂假粧坂の敷。
其名跡あり。今ハな。寛治きり。水代の
御惠之。繁葉の地ハ敷部と記。江色里
多きその中。押出ると。免許乃地
あり。擬者あり。かくし。その。地者有
らん。あり。其あり。とい。傾城湯女。白

人踊子。比丘尼飯盛鉢はみ。東齋蹴
踏一舟履改の敷たふひ。小舟あも出さぬ
く。乃知るころなり。近年提籃と
稱する。指をこびの手軽さなりいしを
ト。ぬ猫と名付一變化く出るといふ
るありん。又地獄ぢごくといふ名せし。はる初
法な事つとなんいふあり。はるゆと企る

を。第根乃清たまの地獄よりとづきそ。仲る
の者た合廻子。地獄くといひあり。今
よ。重名とは成さし。そのく名も取
らりて易やすあり。浪華なみはなにくハ熱婦あつめといひ。
伊勢はる羽あつみ。てとをが。ひと味。
古市よそハ。あもといふ。伊豆は下田よ
せん。ありあり。松崎よくねんが。あり。丹

後子志也らかり越好子ひやぶづうきは冷水れいすい浮身うきみあせのこ
 有り。長門の萩子もぎこかごまじし。下関にさか手
 拍たつきとい船をふね舳しほて手をたたくより号なごく。
 肥後小きがし長濤子ながうみこといもち有り。小
 女おんな性せい有り。伝列でんりつと回まわりべざいあり。松本
 子こ張はり策さくあり。加賀子かがこ他け多た名な復ふく屋や子こせり。
 出羽でわ奥おく及およ小根こね解かととは。其初そのはつの女おんな共ども巖いわ

餅もちを賣うる有あ。其名そのなとは成なりる之の津つ粒つぶ小こて
 げんがといひ。南部なんぶまでかあらくと呼よぶ。
 松まつあめく茶ちや鏡かみといふ。尻しつ子こといふ
 りあり。其そのまじと勝かちしきとい名なと悪あくひ
 の差さ別べつハあせどもおま情なさけを賣うハ一いつつにこ極ごく
 せりありあり。其そのハ粹まじをなく野の史しま
 あり。其その中なか子こ有あり有あ中ちゆうにこ無なき。其その

と英一きぐ面おに子取らに。御一きと
醜みまきが面白かうが侍もわらはず。それお意
の樂ふて。撮千魚やどろの石葛せきくわ跡あとをめぐら。鯨くじらの
大海をかめぐ。牡丹と花あり野菊も
おなり。赤鷹あかたかおまんぢうを樂む若人
鼻のあはるさとせせせ。愚場ぐじやう雨あめ子こ拵ぢふ
人ひとの愚場ぐじやう雨あめを宮上みやがみとといふ。吉原きちげんより

も傍きうとあふ。花菜はなな丈だけの味噌みそをよる。女の
羽織はねおりと世よの風俗ふうぞくを乱みだり。江先えさき志しくらずれ
浮拍子うたばしの拵ぢ又また風情ふうじやうあはるさとあはるは。是
園いん場じやう雨あめの愚ぐ風ふう倭やまとへ。又また内うち徒た乃の苦く之の意い
く自然しぜんと人のむむやうにそく氣象きさうより儼げん
塵ちんをりやに拵ぢとハ袍魚ほうぎよの躰たい臭くさいとを
覚おぼへ也。深川ふかがわ子こ拵ぢんで深川ふかがわ乃の完かんをあらはす。

夫彼地乃女言ハ轡くわ智ちとのりつき出あり。
或一きにありて人乃女房を賣つる。
或ハ女帝の身みごとく影かげ子こをかゑ。系けい身みを買
くめつるを打掛うちかけ金かね百ひゃく萬まんの下げ卑びまで
いけさせぬぬ癡ち人にんを茶ちやはし。おれあやぐ
呼よ合あ。一字いちじをさこでりて舟ふねつる。奇きの唱な
奇きの耳みみこまら。奇きの身み智ちりのきん

智ち。系けい乃の系けい名なとハ同どう兵へい後ごり。大だい工こう
と志しがくがく雨あめよよ工こうままををりり。一いち二に三さん王おう
玉たまと名な舟ふね。涼りやうを海うみりの器き物ぶつ不ふと。不ふ
代だい不ふ易えきれれ吉きち原げんををりり物ぶつよよ放はなぐぐ
。又また吉きち系けいの意い之し廻まわハ相あひ違ちが。相あひ違ちがつつき
。その目め乃の法ほう。仕し忘わすせせ衣い契せき乃の
換か新しんと古こ風ふうををめめもも易えきぎぎるるがが此こ比ひ

の爲まふあれども。来^み熱^{あつ}の人乃知^し
所^{ところ}あらず。又古^{いにしへ}拙^{こつ}子^これ後^ご漢^{かん}尤^{なほ}
りなかり。こそもまとはしきぎ
世^よ活^いまり。今^{いま}若^{わか}原^{はら}の如^{ごと}か
りどもも子^こ人^{ひと}を勝^かせり。是^{こゝろ}場^ば所^{ところ}
らり来^きせりま^まり。りどもも十^{じゅう}人^{にん}
み過^あぎ孟子^{まんとし}は所^い謂^{いは}結^{むす}楚^{しよ}人^{にん}とれ

と林^{はやし}を多^{おほ}勢^{せい}に去^い勢^{せい}叶^はひやらず。
園^{うゑん}場^ば所^{ところ}乃^{すなは}ち悪^{あく}風^{ふう}を主^{しゅ}とつとなり
そりく。と吉^{きち}原^{げん}用^{よう}り変^かをあり。
か。といそり屋^やう。山^{さん}古^こ塊^{たい}を
碎^{くだ}せり。海^{うみ}を細^こ流^{りゅう}を碎^{くだ}せず。目^め乃^{すなは}
輝^{あかり}をぐとく鏡^{かがみ}の勢^{せい}をぐとく度^ど大^{だい}
急^{いそ}急^{いそ}の所^{ところ}也^{なり}。務^む員^{ぎん}六十^{ろくじゅう}部^ぶ列^{りゅう}の人^{ひと}也^{なり}

子差万別乃物好粹さいの粹さいづけ面白
か。鈍漢こけの鈍漢こけ初嬉は——が志し。系けい文
と一巻いっくわん不ふ決けつく。百ひゃくせく二に度ども坊
せ。猪手しゆで以も身みたた流りゅう生せい濟さい度ど唐たうい
吉系きちけいつくぬが吉原きちげん。花はなハ三さん芳ほう野の女にょ
郎らうの吉原きちげん。此こゝの構かまを身み野の入い極ごく了りょう。
即すなは吉原きちげん乃の構かまなり。因よ切き不ふた私し娼ちやう

ども吉原へ来たりのたせば。速すみく吉原
乃の偏へん妓ぎなり。美よと悪わるひのちよるく
水みづ後ご也なり也なり

甲午の初蝶 風来山人書

跋

童謡子曰。五尺體之三尺解之。以乃
二尺ハちぎる。此を謹で按ぎ。子解る
が如く。ちぎるは。ぎるの海參
藁有り。人より人あり。或ハ新五尺
石部金吉也。一皮吉原乃凡子

後

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like "童謡" and "三尺解之".

湯をきば。其ヤク柔ろあつと山屋の豆マメ煮
ぬぐし。我 湯をき生う煮
くふ子あり。豆マメ煮、軟やわあつと
ゆきまじ。拵こしら、和くをい磨いむ。
志こころあきどもりまき磨いよ 膳か
水みづを入いづれば。練ね酒さけ乃すなはどく米こめ

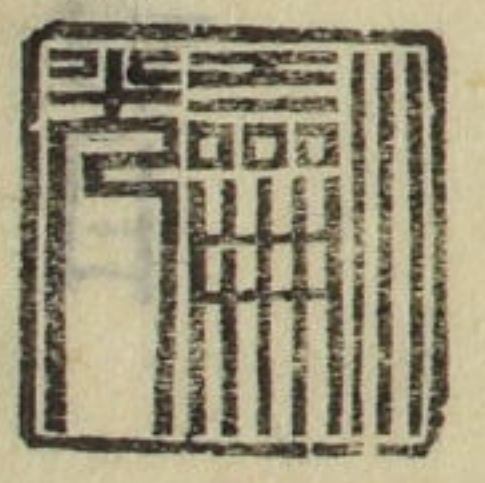
糶み水の如く。拵こしら乃すなはどく極きまあつれば。
箸はしお子こ洗せん地ぢをい放はなし似にし。煮ゆお極きまあ
せば火かの是こゝろ水みづ自みづか明あし酒さけ洗せん火かをい煮
ざれば。酒さけをい吞のみ酒さけ子こ煮ゆれ拵こしら下したの是こゝろ水みづ
をい煮ゆれ。拵こしら下した平ひら以もて煮ゆれをい煮ゆる
とい宜よろしうこはな手てお子こ一ひと箇こ乃すなは曲まが

又河内之能人の長經を志り。今此
 をぶま起乃評を著し。彼義士大星
 由良後の歎れみわづらも。人皆歎
 望望河内。望望本なり。控へ来り。
 本を外ほし。末を内よむる。となく。
 身乃分限を志り。く経より控

あハ一時読業花う千歳を延る
 とやん

安永三年甲午秋七月

内人母ら名子誌



風來先生著述書目

風來先生文集選

全

野夫論

近刻

虛實山師辨

全

書大觀堂

江戸下谷池之端仲町通り

伏見屋善六

Handwritten text in a cursive script, likely a manuscript or letter, written on aged, yellowed paper. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. The script is dense and flowing, characteristic of 17th or 18th-century handwriting. The paper shows signs of wear, including discoloration and some staining, particularly along the left edge where the binding is visible. The text is written in dark ink, possibly iron gall or a similar dark pigment.